伝上杉謙信所用陣羽織八領

——伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告　五——

神谷榮子

内　容

一　はじめに
二　陣羽織八領の概要
三　各陣羽織について
(1)　紙衣陣羽織
(2)　はぐま毛陣羽織
(3)　緋雲文緞子陣羽織
(4)　白雲文緞子陣羽織
(5)　紺・緋羅紗袖替り陣羽織
(6)　緋羅紗陣羽織（裏・黄緞子）
(7)　緋羅紗陣羽織（裏・浅葱緞子）
(8)　白平絹雲竜文描絵陣羽織
四　むすび

一　はじめに

室町・桃山期の陣羽織、即ち初期の陣羽織は、同じく室町・桃山期の初期小袖、初期帷子、初期胴服の場合[註1]と同様、従来は遺品資料が少くて実物に添った研究が極めて困難であった。昭和三十年に上杉家の服飾類が発見され、その中に八領の陣羽織があったことは、それらが伝来がよく、何れも出来た当初の「うぶ」な形、仕立であるため資料価値が高く、初期陣羽織の研究をようやく実物に添った研究可能の段階にまで推進したのでまことに意義深いことであった。

今回、それら八領の精査が一応完了したので、まとめて報告し、今後の研究に資したいと考える。

二　陣羽織八領の概要

上杉家に伝来する八領の陣羽織は、八領ともに上杉謙信（享禄三～天正六 1530～1578）所用と伝えられている。その伝来に従えば、今日残っている陣羽織では最古のもので、初期の陣羽織を知る上にまことに貴重な存在である。

陣羽織は陣胴服とも具足羽織ともいわれ、武人が軍陣で具足の上に用いた上衣である。陣羽織が用いられるようになったのは中世末期の戦国時代になってからで、この頃になると、戦術や武具に大きな変化があらわれた。即ち、従来の騎馬戦から集団歩兵戦への転換で、軍略を用いて

大軍を機敏に動かし、戦闘も大部隊が一団となって山野に闘い、城を攻守するようになってきたので、必然的に身軽さが要求され、鎧も軽快で機能的な具足に変り、寒さや荒天に備えて陣羽織が用いられはじめた。

元来こういった戦衣の特徴として、一方に極端な実用性があるとともに、一方にまた装飾性を持った派手やかな面がある。実用面は、戦陣における必要性で当然極端な実用性が要求されるのであり、装飾面は、武人が戦場で威容を示して士気を鼓舞し、更に最後を華々しく飾ろうという心理から求められている。

陣羽織にこの特徴を見ると、初期陣羽織、即ち室町・桃山期の陣羽織には一般に純粋な戦場の衣料としての実用的な面が濃厚で、その形などに非常に自由なものや凝った意匠のものが多い（例、挿図21、22）。江戸時代になって泰平な日が続くと、いわゆる戦衣としての性格が失われて、主として野外における威儀を示すための儀礼的なものに変貌する。即ち戦衣としての実用性の面が失われ、装飾性の面が強調されて派手やかな立派な裂地が用いられたり、夏冬の別ができたりしているが、形は形式化して自由な意匠のものが少くなっている（例、挿図25、26）。

陣羽織の生地には種々なものが用いられているが、元来が陣羽織は野外用のものであるだけに渡りものや羅紗などが多く用いられている。

さて、上杉家伝来の陣羽織八領は、軍陣用のものであるため、何れにも実用面に重点がおかれていることが観察されるが、全体に材料や形状、仕立て方などに自由さが目立ち、八領にはそれぞれに独自の特色があらわれていて興味深い。また何れも自由な意匠が凝らされているが、着装効果にも充分な配慮がなされているようで、その点でも上杉家伝来の胴服同様きわめて優れており、美術的芸術的価値の高いものであることが注目される。

ところで、これら八領の陣羽織は、上杉家伝来の服飾類の中で胴服（報告四――美術研究二四二、二四三、二四四号――参照）に次いで華やかで美しく贅沢で、凝った意匠である。特に使用材料が自由に効果的に用いられている点と、身頃、襟、袖、縁裂、縁飾り、裏裂等が実に端的明快な対比対照の美を以って組合わせられている点とでは胴服を凌いでいる感がある。

使用当時の損傷、汚れ、しみ等は、胴服同様に上衣という性格も作用しているのであろうが上杉家伝来の小袖（報告二――美術研究二二八号――参照）や帷子（報告三――美術研究二三三号――参照）にくらべ非常に少い。

また保存状態は極めてよく、白平絹雲竜文描絵陣羽織(8)に顔料による損傷があった以外は、当初の状態とさほど変っていないのではないかと思われるような良好な状態で今日に伝えられている。特に羅紗は年代を経ると堅くなるものであるが、羅紗の陣羽織は三領ともに、新品の羅紗同様柔かく温かい感触であるのは、あながち三領に用いられている羅紗が極上質であるためばかりではないであろう。上杉家に伝わった謙信、景勝所用の服飾類は百点にあまるものがすべて驚異的な良好な保存状態で伝えられていることは、報告一（美術研究二一六、二一九号）のはじめにも述べたところであり、個々のものについてもこれまでに屢々言及しているところであるが、これら八領の陣羽織も、室町・桃山期の他の陣羽織とくらべると同時代のものとは思われないほど裂地の損傷や褪色が少

い。

これら八領の陣羽織を表に用いてある材料で分けると渋紙製の紙衣陣羽織が一領(1)、チベット高原やヒマラヤ地方に住む牛の一種ヤクの毛を綾裂に植えるようにとじつけたはぐま毛陣羽織が一領(2)、緞子の陣羽織が二領(3)、(4)、羅紗の陣羽織が三領(5)、(6)、(7)、描絵の陣羽織が一領(8)である。これらの中、羅紗とヤクの毛、羅紗陣羽織(5)、(6)、(7)や緋雲文緞子陣羽織(3)の縁飾りのモールは輸入品であり、そのほか緋雲文緞子と羅紗陣羽織三領の裏裂の緞子、紙衣陣羽織(1)の縁裂等は文様、地質からみて中国産の感が強い。

これらはそれぞれに陣羽織の実用性を考慮した上で、材料や趣向の贅が凝らしてあるようである。贅の凝りようは、上杉家伝来の胴服、小袖、帷子に見られたような、実際に行われている贅沢よりは目立たないように表現されているのではなく、相当派手に豪華さを見せている。戦陣における戦衣の装飾性を存分にあらわしたのであろう。

形の上(一覧表及び陣羽織(1)〜(8)の実測図参照)では、袖なしが五領(1)、(2)、(4)、(6)、(7)、袖つきが三領(3)、(5)、(8)で、袖のついている三領は、ともに広い身幅、狭い袖幅で後身幅と袖幅の対比が一・六弱、室町・桃山期の初期小袖、初期胴服の特徴を備えている。

また八領を通して見たとき、特に注意をひかれるのは身丈が長短さまざまであることである。これは形に拘束されない実用性と装飾性の両面の自由なあらわれと考えられる。紙衣陣羽織(1)の一三五センチが最も長く、これは謙信の身長[註2]から推測すると具足の上に着用するにしてもその裾は地面から幾らも離れない長いものである。短い方では白平絹雲竜文描絵陣羽織(8)の八六センチが最短で、次にはぐま毛陣羽織(2)の八九センチが短く、この二領が他の陣羽織に比し格段に短くなっている。この長短三領を除いた五領は謙信所用の胴服の身丈とほぼ同じである(一覧表並に報告四の一覧表——美術研究二四二号、二〜三頁—照合)。

紙衣陣羽織(1)と白雲文緞子陣羽織(4)は身丈、前幅、襟の折り返えり側、縁裂、中入綿の有無を除いては形も法量も非常に近似しており(一覧表、図版Ⅲa、挿図1a。2、8a・b、9照合)形態上では同種といえるであろう。ともに戦陣における実用性に重点がおかれているようである。この二領には衽がついており、袖なしである点以外は、上杉家伝来の小袖や胴服に共通して見られる形態上の初期小袖の特徴がこの二領にもある(一覧表、挿図2、9照合)。即ち、身幅(b、h)が広く、襟肩あき(c=一般に和裁でいう襟肩アキの二倍の寸法)が狭く、衽下り(d)が少く、立褄(e)が短く、衽幅(f)が広い。他の六領には衽はなく、それら六領の陣羽織は袖のあるものもないものも何れも極めて簡単な形をしている。

襠は八領の何れにもついていない。

背割レや裾脇アケは白平絹雲竜文描絵陣羽織(8)を除いて何れにも背割レ乃至は裾脇アケがあり、紙衣陣羽織(1)と白雲文緞子陣羽織(4)の二領は背割レと裾脇アケの両方がある。はぐま毛陣羽織(2)は両脇が全部あけてある。

紙衣陣羽織(1)は薄く綿[註3]が入っており、白平絹雲竜文描絵陣羽織(8)は比較的厚い綿入であるが、他の六領は袷である。これら八領の裏裂の地質はなかなか合理的なものがついていて、表の重量の軽いものには平

（寸法の単位はcm）

b/a	c 襟肩アキ×2	d 衽下り	e 立棲（襟下）	f 衽幅	g 合褄幅	h 前身幅	i 裄	j 袖口	k 襟幅（襟折り返側）	l 袖丈 袖アキ	m 身丈	重量	実測図 照合
——	14.0	12.0	18.0	19.5	19.0	39.5	——	——	11.0（襟首囲りを外側）	56.0	135.0	600 g	挿図2・3
——	18.0	——	——	——	——	裾83.0 胸32.0	——	——	約 4.5（綿入）	——	89.0	830 g	挿図5
1.54	15.0	——	28.0	——	——	29.0	61.0	——	襟　欠	51.5	118.0	560 g	挿図7
——	15.5	13.0	17.5	19.5	19.0	31.5	——	——	13.5（内側）	63.0	114.0	530 g	挿図9
1.57	15.0	——	13.0	——	——	31.0	63.0	23.0	8.0（立てたまま）	46.5	114.5	1820 g	挿図11
——	20.0	——	——	——	——	裾37.5 胸34.5	——	——	10.0（立てたまま）	44.0	112.0	1730 g	挿図13
——	11.0	——	15.5	——	——	42.0	——	——	7.5（立てたまま）	37.0	105.0	1680 g	挿図15
1.56	15.0	——	——	——	——	27.0	52.5	——	15.0（内側）	45.0	86.0	400 g 修理後重量	挿図17

絹、他の材料の三倍からの目方がある羅紗（一覧表の重量の欄参照）には、比較的生地が厚く、経糸、緯糸ともによく製練されているため生地が丈夫な緞子が用いてある。

胸紐に関しては表に示してあるように、八領には有、無、欠、不詳いろいろあるが、はじめから明らかに紐がないと認められるはぐま毛陣羽織(2)、緋羅紗陣羽織（(7)、裏・浅葱緞子）の二領は表の材料や形の関係で、着用に際しては胸紐の必要はなさそうである。胸紐が必要な場合でない限り、着たり脱いだりの頻繁な上衣の類は却って胸紐なしの方が便利である。緋羅紗陣羽織(6)、裏・黄緞子）と白平絹雲竜文描絵陣羽織(8)の胸紐は装飾的性格が多分にある紐のようであるが、紙衣陣羽織(1)、白雲文緞子陣羽織(4)の胸紐は、それら二領の地質、形を考えると、着用に当っては胸紐の必要がありそうで、この場合は必要からつけられた紐で装飾性は少いようである。概して上杉家伝来の陣羽織の胸紐は、同じく上杉家伝来の胴服の胸紐に比し実用性が強く、装飾性が弱いようである。

仕立は桃山期以前の小袖や胴服、能装束等に共通してみられる大ざっぱさと裁縫技術の幼稚さが、これら上杉家伝来の陣羽織にも見られるが、しかし緋雲文緞子陣羽織(3)と三領の羅紗陣羽織（(5)、(6)、(7)）の計四領は、寸法の点でも当時のものとしては相当によく神経が行きとどいており左右相称の個所で、左右同寸法であるべき寸法が異る（室町・桃山期の仕立では、こういう個所の寸法は五割以上が五ミリから一センチ前後も異るようである。この一連の報告では、一覧表の寸法は適宜一方を採ったり、中間数値を採ったりしている）といったようなことは比較的少く、極めて

伝上杉謙信所用陣羽織形状・法量一覧表

	衽	襠	背割レ 裾脇アケ	中入綿	胸紐	胸紐用の乳，三角裂	袖 袖の形	a 袖幅	b 後身幅
(1) 紙衣陣羽織 （裏・萠黄平絹）	有	ナシ	背割レ 65.5 裾脇アケ51.0	薄綿入	萠黄平打紐 0.8×45.0	穴	袖ナシ	——	39.0
(2) はぐま毛陣羽織 （裏・紅平絹）	ナシ	ナシ	両脇全開	袷	ナシ	——	袖ナシ	——	裾38.0 背33.0 肩32.5
(3) 緋雲文緞子陣羽織 （裏・萠黄平絹）	ナシ	ナシ	背割レ 46.5	袷	不詳	不詳	広袖	24.0	37.0
(4) 白雲文緞子陣羽織 （裏・黄平絹）	有	ナシ	背割レ 49 裾脇アケ 50	袷	紅角八ツ打紐 55＋10（フサ）	穴	袖ナシ	——	38.5
(5) 紺・緋羅紗袖替り陣羽織 （裏・萠黄緞子）	ナシ	ナシ	背割レ 39	袷	欠	乳 （萠黄平絹）	小袖	24.5	38.5
(6) 緋羅紗陣羽織 （裏・黄緞子）	ナシ	ナシ	裾脇アケ 28	袷	黄四ツ打紐 （丸） 28.5＋2（フサ）	穴	袖ナシ	——	$\left(\text{背肩幅}\times\frac{1}{2}\right)$ 39.0
(7) 緋羅紗陣羽織 （裏・浅蔥緞子）	ナシ	ナシ	裾脇アケ 35	袷	ナシ	——	袖ナシ	——	$\left(\text{背肩幅}\times\frac{1}{2}\right)$ 42.0
(8) 白平絹雲竜文描絵陣羽織 （裏・紅平絹）	ナシ	ナシ	ナシ	綿入	赤角八ツ打紐 45＋3.5（フサ）	乳 （紅平絹）	広袖	20.5	32.0

細かい針目の、糸がよく締っている丁寧で立派な仕立である。

また、羅紗製のものを除く袷仕立の陣羽織、即ち、はぐま毛陣羽織(2)、緋雲文緞子陣羽織(3)、白雲文緞子陣羽織(4)の三領は、報告二で詳述した浅葱紬、裏紅緯練袷小袖（小袖の(10)）や報告四で詳述した浅葱綾竹雀紋繍、襟摺箔描絵胴服（胴服の(5)）と同様な四つ縫の方法が採用された仕立て方がしてある。

以下順次個々の胴服について詳述する。

三　各陣羽織について

(1)　紙衣陣羽織（図版Ⅲa、挿図1）

この紙衣の陣羽織は、楮紙に柿渋を引いた渋紙製で、綿が薄く入っている。形は写真でも見られるように単純である。この陣羽織の丈は陣羽織八領中特に際立って長い（一覧表参照）。この一三五センチという丈は、具足の上に着けるのではあるが一五七、八センチと推測される謙信の身長[註2]から考えると、裾近くまである極めて長いものであったことが想像される。幅は前身幅、後身幅とも三九センチからある広いもので（八領中二番目に広い）、その上衽までついているから相当にゆとりがある広いものである。長大ではあるが裾には背割レと裾脇アケの二種類のアキがあり、袖アキも広いので、着脱や活動には不自由はなかったと思われる。なお裾から胸のあたりにかけて、火薬の粉か焚火の粗朶でもはねたかと思われるような小さな焼け焦げの穴が点々と残っている（挿図1b参照）。渋紙製という雨露を防ぎ、保温度が高く、目方が軽く、丈夫な材質で、それ

b.　同　部分

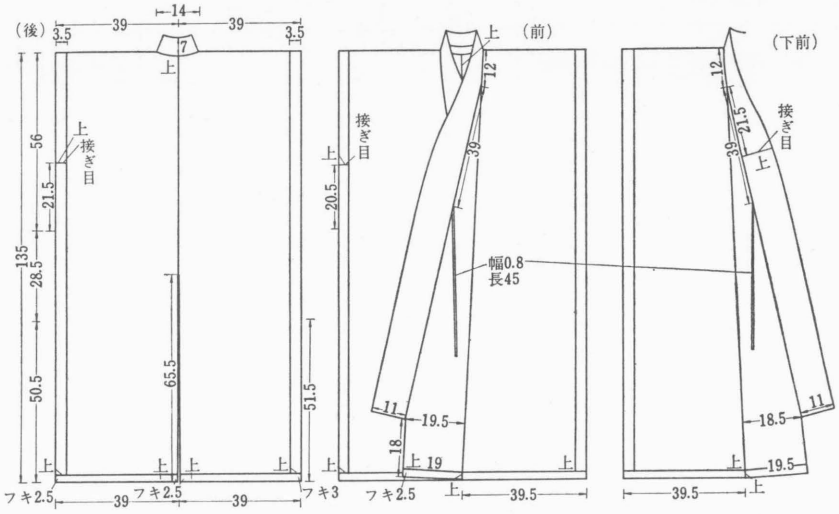
挿図1　a. 紙衣陣羽織(1)　背面
米沢　上杉神社蔵

も薄く綿を入れた仕立、単純で長大な形態、火の粉の痕跡等総合して考えると、この陣羽織は如何にも戦陣用の上衣といった実用性、機能性に富んだ要素が濃厚に窺われる。しかし、渋紙の質感と色合、縁裂、裏裂、胸紐との組合わせの対照には堂々とした見事な統一があり、実用性、機能性のみに終始しない、人を圧する武将の風貌を彷彿させるものがある。

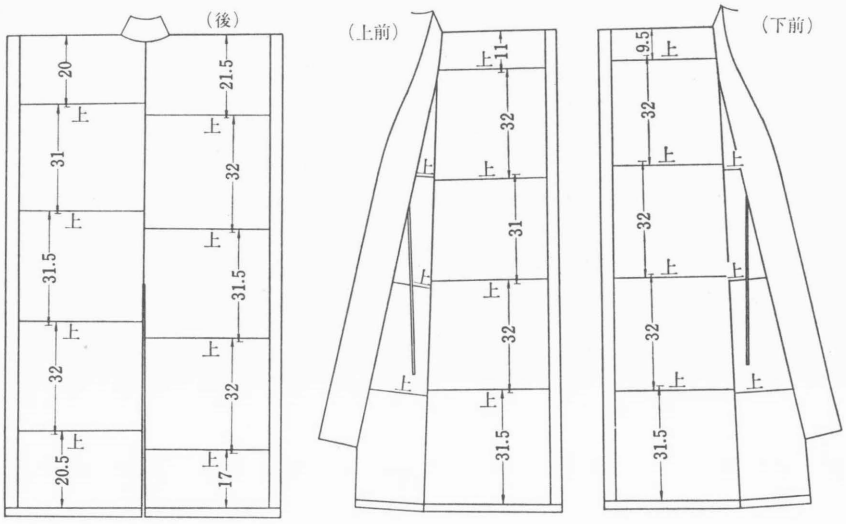
当時の紙衣陣羽織の類例に東京国立博物館蔵の紙衣陣羽織がある（挿図20）。これは襟も裏もすべてが渋紙でできている実用性の強いもので、背中や前に書かれた神仏の名号や題目などが、戦場での守護を祈願する心持をあらわしている。

（形状、法量、仕立て方）

形状、法量は一覧表の(1)並びに挿図2。薄く綿が入っている渋紙製で、渋



挿図2　紙衣陣羽織(1)　実測図　　註　単位はcm，上は折被せの上側の略



挿図3　紙衣陣羽織(1)　渋紙接ぎ目実測図
註　接ぎ目の重なりは1.1cm前後，上は接ぎ目の上側の略

紙は挿図3のように貼り合わせて接いである。挿図では貼り合わせ部分で重なりが上になっている側に「上」の字を記入したが、これでわかるように約四〇センチ幅、長さ三一、二センチの渋紙を、貼り代を一センチ強とりながら順次貼り合わせて接いでいったもので、接ぎ合わせた長い渋紙を裂一幅と見做して仕立ててある。襟裂と左右両脇の縁裂には茶色花唐草文の銀襴が用いてあり、裏裂は萠黄色練緯（ねりぬき）註4で、表の渋紙や襟裂、縁裂との対照が清々しい。通し裏である。その裏裂と同色の萠黄絹の平打紐が胸紐としてついているが、その紐は至って無雑作な方法でつけてある。即ち襟附の縫目を挟んで襟と衽に一つずつ錐であけたような穴が並んでいるが、その二つの穴を通して紐を裏にまわし、表側で結び合わしてある。

襟裂、縁裂の銀襴は、襟では下前の胸のあたりに、右脇は前の上方で脇の下あたりの位置に、左脇は背面の上方で、やはり脇の下に近い位置に接ぎ目がある（挿図2参照）。接ぎ目は縫い目を割らずに縫代が片側に折ってあるが、襟は下方に折ってあり、両脇は左右とも上方に折ってある。挿図2の接ぎ目の傍に記入してある「上」の字は、縫代が折ってある側、即ち折被せ側で、重なりのうち高く―上に―なっている側を示す。この銀襴裂は、襟だけは銀襴の方に綿がふくませてあって裏裂がくけつけてあるが、他は裏裂に綿がふくませてあり銀襴や渋紙がくけつけてある。また下前の立褄は綿は渋紙にふくませ裏裂がとじつけてあり、上前の立褄は渋紙と裏裂の間に綿がはさまれている。襟は背縫の延長線の位置で幅七センチに内側に折り、左右それぞれ四五センチ間に折り込み分を笹の葉形に消している。内側に折り込まれた分は、萠黄色Z撚の太い絹糸で約一センチの針目でとじつけてある。裾には二・五センチ幅の施があるが、背面右脇では三センチ幅になっている。背縫の折被せは表裏ともわれわれがいう正しい方向（美術研究二二八号、二〇頁、挿図3参照）になっている。裾脇アケと袖アキの間の二八・五センチ間は、表裏ともに白絹糸S撚の太い糸で一センチ前後の針目で、前身頃と後身頃がつき合わせにとじつけてある。

縫糸は、襟の折込み分をとじつけてある糸以外は白絹糸S撚の太い糸で、針目は、縫目は約〇・五センチ、くけ目は約一センチになっている。

（表）挿図1b

紙衣――柿渋を引いた渋紙が糊づけで接ぎ合わせてある。この陣羽織に用いられている渋紙の大きさは、幅は約四〇センチ、長さは三一センチから三二センチである。因みに同時代の紙衣製の遺品から紙一枚の大きさを当ってみると、挿図20の東京国立博物館蔵の紙衣陣羽織では、一枚の大きさが幅は三五センチ前後、長さは二八センチ前後であり、静岡・石川家蔵の伝太閤拝領胴服（報告四、挿図16――美術研究二四三号、二八頁）では、同じく一枚の大きさが、幅は明確にはわからないが約四〇センチ、長さは二七センチ前後である。

縁裂――茶色の花唐草文銀襴で、文丈は七センチ前後、窠間幅は五センチ前後。経糸も緯糸もともに赤味を帯びた茶色で、Z撚であるが、経糸は細く、緯糸は黄緞と見紛うばかりに太い。組織は、地は経の五枚繻子で、文は平銀糸、銀糸の幅は約〇・五ミリ、地搦みである。密度は一センチ間に、経は八〇本前後、緯は一六越前後、銀糸は七、八本である。

（裏裂）

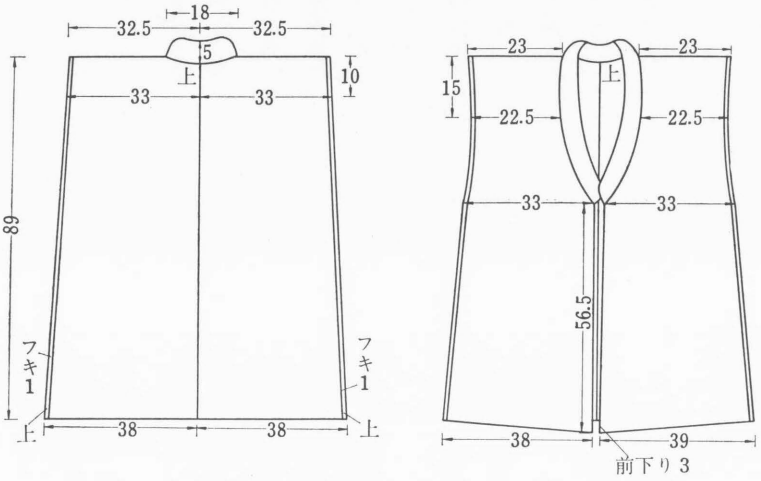
先染の萠黄色練緯で、経糸は青味を帯びた濃い萠黄で糸は細く二本ずつ寄っており、緯糸は黄味の多い萠黄で糸が太い。密度は一センチ間に、経は四四本前後、緯は三四越前後である。

(2) はぐま毛陣羽織（図版Ⅲb、挿図4）

はぐまは白熊の字を当てるが、この陣羽織の毛は熊の毛ではなく、チ

挿図4　a．はぐま毛陣羽織(2)　背面
米沢　上杉神社蔵

b．同　部分



挿図5　はぐま毛陣羽織(2)　実測図

くしたのが白熊（はぐま）の毛、黒く染めたのが黒熊（こぐま）の毛、赤く染めたのが赤熊（しゃぐま）の毛である。

この陣羽織は、その白熊の毛を束ねて結んだり、S撚の太い白絹糸で縛ったりして、四センチから六センチの間隔で白綾の表裂にとじつけた（挿図4b、とじつけたS撚の太い白絹糸は、二、三センチから七、八センチ余して切ってある）もので、肩の方の毛は三五センチ前後はあり、裾に行くほど短く、最下段は十三、四センチである。

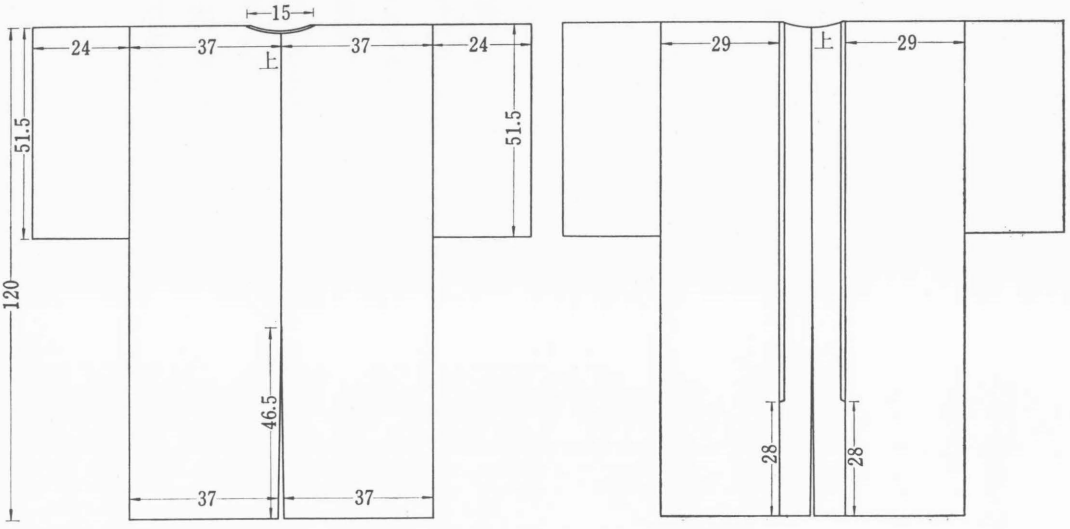
こうして植えつけた毛は、ふさふさと毛皮のようになって、裏裂や襟裂の紅に映えて、気品ある威嚇を示している。

袷仕立で、襟だけ綿入になっている。胸紐はなく、両脇はとじてない（胸紐も両脇のとじも痕跡がないので始めからそれらのない形のようである）ので着脱は至って簡単である。

（形状、法量、仕立て方）

形状、法量は一覧表の(2)並びに挿図5。重量は八三〇グラムで、小型の陣羽織としては重い。はぐまの毛の目方が加わっているからである。はぐまの毛のとじつけ方は前述した通りであるが、肩山では、はぐまの毛を前身頃と後身頃の両側に振り分けにし、その上に肩山線に添って撚金糸二本を引揃えにして置き、その金糸を太目の白絹糸で針目細かく押さえてとめてある。このように目立つ肩山では撚金糸を使って装飾的なとじ方をするなど念の入っ

ベット高原やヒマラヤ地方原産のヤク（Yak）という牛の毛である。ヤクは毛牛とも犛牛（ほう）ともいわれ、全体柔らかい長毛に覆われている。このヤクの毛を白



b．同　　部分

挿図6　a．緋雲文緞子陣羽織(3)　背面
米沢　上杉神社蔵

挿図7　緋雲文緞子陣羽織(3)　実測図

があり、端は角である。裾は突き合わせになっている。背縫の折被せは表裏ともわれわれがいう正しい方向(美術研究二二八号、二〇頁、挿図3参照)になっている。背縫は四つ縫のようである。

縫糸は、白絹糸でS撚。針目は、縫目は約〇・五センチ、くけ目は約一センチになっている。

(表裂)　挿図4b

白地の入子菱文綾で、文丈は二・二センチ前後、窠間幅は四・三センチ前後である。非常に練りの少い生地で、経緯とも糸の撚はほとんどないようである。組織は、地は経の六枚綾で／(右上り)、文は緯の六枚綾で／(左上り)、密度は一センチ間に、経は六〇本前後、緯は四〇越前後である。

(裏裂)

後染の紅の練緯で、経糸は多少細目で二本ずつ寄っており、密度は一センチ間に、経は四四本前後、緯は四二越前後である。

(3)　緋雲文緞子陣羽織(図版Ⅱa、挿図6)

この陣羽織は襟がはずされて欠失している。表は緋色の上質の雲文緞子で、襟附、襟下、裾囲り、背割レ、背縫、袖附、袖口には撚金糸の入った薄浅葱モールで縁飾りがしてあり、裏には、萠黄色の精好織のような目のつんだ平織の裂がついており、表裂や縁飾りとの対照が品よく柔和で鮮やかである。その上、この陣羽織は汚れやしみがほとんどなく綺麗であるかた凝り方である。

衿で、通し裏である。

両脇には約一センチの袍

ら、襟が欠失していることはまことに残念である。襟が失われているため胸紐がつく部分がどのようになっていたのか不明で、胸紐や胸紐用の乳があったのかどうかわからない。

（形状、法量、仕立て方）

形状、法量は一覧表の(3)並びに挿図7。袷で、通し裏である。袍はなく、普通ならば袍があるような個所の裾や袖口、背割レは、縁を縁飾りのモールで挟んである。袖下と脇縫は四つ縫がしてあり、縫代は何れも背面の側に入っている。背縫と袖附はモールの縁飾りがつけてあるので表裏別々に縫い合わせてあり、表裏にはその縫い合わせの後で、その縫目の上にモールを平たく置いて糸で押さえとめてある。背縫の折被せは（表裏の方はモールの下になってかくれているが観察は可能であった）表裏ともわれわれがいう正しい方向（美術研究二二八号、二〇頁、挿図3参照）になっている。襟囲りから立褄、裾、背割レに廻っている縁飾りは、仕立て方から見ると、順序としては襟附の前の、身頃や袖の縫い合わせでは最後の段階でつけられているようである。立褄、裾、背割れのモールは、前述したように二つ折りにして裂が挟みこんであるが、襟囲りの部分は背縫や袖附のようにモールが平たく置いてつけてある。この襟囲りの部分は襟が欠失しているため裏面が見え、その裏面で見ると、モールは比較的太い黄色絹のZ撚の糸で、ハざしでおさえとめてある。針目は○・五センチから○・六センチである。モールはどの部分もきっちりつけられている。モールは薄浅葱のZ撚の絹糸でできており、幅は約○・七センチで、S撚の撚金糸が一幅に四本、筋条に入っている。

縫糸は、四つ縫の個所である袖下、脇縫は、襟囲りのモールをおさえてあるハざしの糸と同じ比較的太い黄色絹のZ撚の糸が使ってある。背縫の糸は表裏とも比較的太い萠黄色絹のZ撚の糸である。針目は、背縫の表は○・五センチから○・六センチ、裏はやや細かく○・三センチから○・四センチで、四つ縫の個所では○・五センチから○・六センチとなっている。

なお襟囲りには、表裂にも裏裂にも襟をはずした後に黒絹のZ撚の縫糸が残ってついている。針目の跡は○・五センチから○・六センチぐらいである。

（表裂）　挿図6b

上質の緋色雲文緞子で、この裂の雲文は比較的大きく、配列も充分に間隔をとった互の目で、悠々として立派である。文丈は一三・八センチ前後、窠間幅は一〇センチ前後である。経糸、緯糸ともと緋色の先染で、経糸はZ撚、緯糸は撚は不詳であるが、比較的太い糸で、太さが揃っている。組織は、地は経の三枚綾で／（左上り）、文は緯の六枚綾で／（左上り）、密度は一センチ間に、経は七〇本前後、緯は三〇越前後である。

（裏裂）

上質の萠黄平絹で、経糸、緯糸ともに萠黄色に先染してある。緯糸が太く、打ち込みがよく、しっかりと目がつんだ平織である。密度は一センチ間に、経は五八本前後、緯は二八越前後である。

(4)　白雲文緞子陣羽織（挿図8）

形の上では紙衣陣羽織と同形で、紙衣陣羽織より丈が二〇センチばかり短い。袷である。紙衣陣羽織同様、裾には背割れ、裾脇アケの二種類のアキがあり、袖アキも広いので着脱や活動には便利であったと思われる。

白地の雲文緞子であるが地質はたいして上質ではなく、前身頃にも後身頃にもしみあとが多い。裏は黄色の練緯で、裾の袍、両脇の袍となって表にも出ている。胸紐は紅絹の角八つ打紐で、太さは一辺の長さが○・四センチから○・五センチである。この陣羽織は実用面の目的に重

挿図8　a．白雲文緞子陣羽織(4)　米沢　上杉神社蔵

b．同　背面

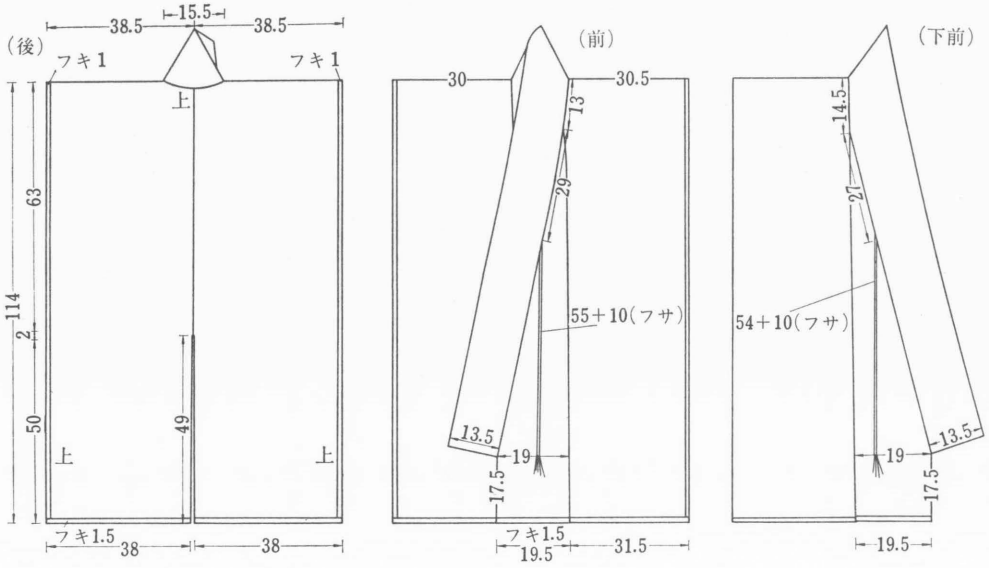
c．同　部分

点が置かれているようであり、またしみあとや表裏の汚れ、損傷から、実際にもよく使われたらしい様子がうかがわれる。

（形状、法量、仕立て方）

形状、法量は一覧表の(4)並びに挿図9。袷で、通し裏である。両脇の袵は約一センチ、裾の袵は約一・五センチで、端は角である。

胸紐は紙衣陣羽織と同様に無雑作な方法でつけられている。即ち襟附の縫目を挟んで襟と衽に一つずつ錐であけたような穴が並んでおり、その穴を通して結びつけてあるのであるが、この陣羽織の場合は紐を二つに割って穴に通し、裏側で結んである（紙衣陣羽織の結び目は表側）。背縫の折り被せは表裏ともわれわれがいう正しい方向（美術研究二二八号、二〇頁、挿図3参照）になっている。背縫は四つ縫がしてあり、背割レはくけ合わせになっている。襟附は、浅葱紬、裏紅練緯袷小袖（小袖の(10)、報告二――美術研究二二八号参照）や浅葱綾竹雀紋繡、襟摺箔描絵胴服（胴服の(5)、報告四、中――美術研究二四三号参照）の襟附と同様の三枚一緒に縫ってから一枚をくけつける方法がとってある。即ち、襟の外側の襟附と表身頃、裏身頃の三枚が一緒に縫われ、その後で、襟の内側の襟附部分がくけつけてある。襟は紙衣陣羽織のように襟首囲りのところを折ってつけつけてはなく、そのような痕跡もない。小袖の襟のように適当に内側に折り込んで着用したと考えられる。両脇に



挿図9　白雲文緞子陣羽織(4)　実測図

は裾から五〇センチ上ったところに二センチの間、前身頃と後身頃をつき合わせに、黄色絹のZ撚の糸二本どりで糸が渡してとじてある。ただ左脇は現在とじ糸がとれて前身頃と後身頃が離れている。

縫糸は比較的太い白絹のS撚の糸で、縫目は〇・二センチから〇・三センチの比較的こまかい針目で、くけ目は一センチから一・二センチぐらいの針目である。

（表裂）挿図8c

上質とはいえない白の雲文緞子で、雲文と宝尽しの文様が一段おきに互の目に配されている。文丈は七センチ前後、窠間幅は四・七センチ前後である。経糸、緯糸ともにS撚で、組織は、地は経の五枚繻子、文は緯の五枚繻子で裏組織、密度は一センチ間に、経は九〇本前後、緯は三〇越前後である。

（裏裂）

後染の黄色の練緯で、この黄色は幾分茶がかっている。経糸は細く二本ずつ寄っており、密度は一センチ間に、経は四〇本前後、緯は三〇越前後である。

(5) 紺・緋羅紗袖替り陣羽織（図版I、挿図10）

外来裂の羅紗を用いた陣羽織は、上杉家にはこの袖がついた陣羽織と袖のつかない陣羽織二領(6)(7)との計三領が伝わっている。三領とも羅紗の質が極めてよく、また保存もよいので、約四百年経ている今日でも、羅紗は新しい時のように柔らかく温かく、虫喰いのあともほとんどない。三領とも裏は上質の緞子が用いてあり、それぞれに表との対照が見事である。これら三領に用いてある緋の羅紗は鮮やかな深紅で、猩々緋の羅紗といわれるものであろう。

この袖のついている羅紗の陣羽織は、身頃は紺、袖は緋の袖替りになっている。袖替りは、肩裾、段、片身替りとともに室町末から桃山・江戸初頭に多い意匠構成の一つで、わが国の衣服の特徴である直線裁断が、巧みに効果的に利用されている。この袖替りの陣羽織では、身幅が広く袖幅が狭いこの形の上で、中央にあって面積を広く占める身頃に紺を、両端にあって面積の少い袖に緋を配したのは全体の落着きの上からいっても成功しており、且つ、緋の羅紗と同色のモールで紺の身頃を襟附、立褄（襟下）、裾、両脇、肩山、背縫、背割れと縁飾りしているのは、色彩配分の上で調和よい安定感を見せている。また、襟、袖附、袖の縁飾りには撚金糸の入った萠黄色モールが用いてあり（挿図10b）、羅紗の裁ち目は、紺羅紗の方（襟裏の外周、立褄―襟下―、裾、背割れ）は黄色緞子で、緋羅紗の方（袖口、袖下外周）は黒繻子で玉縁にしてくるんであるが、黒繻子の玉縁は鉄媒染のために朽損し[註5]、現在は九割近くは失われている。

これら縁飾り、玉縁の使い分けは、紺と緋の羅紗の使い分けを基盤に、細心の配慮がなされ、至って効果的であるため、見るものに何の抵抗も感じさせず、この袖替り陣羽織全体を落着いた安定感のあるものにしている。

また、この袖替り陣羽織が羅紗であることもこの意匠を落着いたものにしている。羅紗特有の重厚な感触と光沢が紺色と緋色の華やかな対照を、調和よく品よくまとめている。

この陣羽織は、羅紗でできており、野外における雨露、寒さを防ぐ意味で実用向きではあるが、一方、胸がすくような単純直裁な意匠、品よく落着いた華やかな雰囲気は、戦場における武将の威容を表示する意味

挿図10 a．紺・緋羅紗袖替り陣羽織(5)　背面
米沢　上杉神社蔵

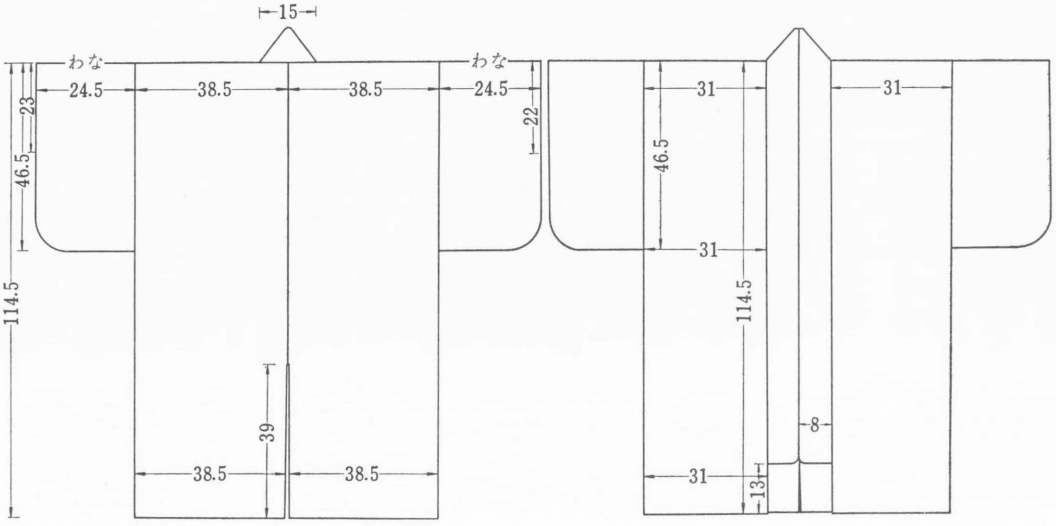
b．同　　部分

でもきわめて効果的であると思われる。

（形状、法量、仕立て方）

形状、法量は一覧表の(5)並びに挿図11。袷で、裏は緞子の通し裏である。袖山は小袖や胴服の袖山同様わなであるが、肩山は、肩山線に添ってつけてあるモールの縁飾りの破損個所から見ると接ぎ目になっている。肩山と襟附（襟附線に添ってつけてあるモールの縁飾りも破損個所があるので、そこから襟附の状態を見ることができた。）の接ぎ目は、Z撚の晒してない麻糸（苧麻糸）で、〇・三センチから〇・四センチの細かい間隔の針目で、裁ち目を突き合わせにかがってある。襟附の内側に、肩山から右は三三センチ、左は三二センチ下った位置に乳がついている。幅が〇・九センチ、長さが二つ折りで一・六センチの萠黄平絹である。右の乳は竪裂が使ってあるが、左の乳は横裂が使ってある。左右とも縫目は下になっている。この乳には中に芯が入れてある。裏裂の背縫の折被せは、われわれがいう正しい方向（美術研究二二八号、二〇頁、挿図3参照）になっている。同

c．同　　裏裂



挿図11 紺・緋羅紗袖替り陣羽織(5)　実測図

じく裏裂の襟附の折被せは、襟首囲りの約四五センチ間（後身頃の襟肩あきと前身頃は左右とも肩から下約一五センチまで）だけが襟の方が高く（上に）なっており、それより下方は身頃の方が高くなっている。

縁飾りのモール（図版I、挿図10a、b参照）は、萠黄色モール、緋色モールともに幅は〇・七センチで、萠黄色の方は萠黄絹糸製で中央にS撚とZ撚の撚金糸が二本引揃えて筋に通っており、緋色の方は緋色絹糸製で、中央に同色の太い糸がZ撚風に一本筋に通っている。この二種類のモールは、どの個所でも平[註6]につけられており、両袖口や右脇裾の損傷個所等から見ると、モールの中央部分が羅紗の裏側まで通ってしっかりとじつけてあり、更にモールの両側端が、羅紗の比較的上層部をすくうようにしてかがりつけてある。モールの取附に用いてある糸は、萠黄色のモールには萠黄色のS撚の絹糸で、緋色のモールには紅色のS撚の絹糸である。縫目は、羅紗の裏側に出ている針目（モール中央部のとじつけ糸）が〇・四センチ前後、モール両側端ののかがりつけの針目の間隔も〇・四センチ前後である。実に几帳面に丁寧につけてある。

羅紗の裁ち目をくるんである玉縁の裂の黄色緞子と黒繻子は、ともに羅紗の表側で玉縁の幅の分だけ控えて縫いつけられ（針目は〇・二センチから〇・三センチで、使用糸は紅色絹のS撚の糸）、羅紗の裁ち目をくるんで裏側に折り返っている。その裏側に廻って来ている玉縁裂の上に、裏裂を縫代を内側に折ってかぶせ、約〇・二センチの細かい針目でかがってある（使用糸は白絹糸で撚は不詳）。このようにして玉縁裂に端がかがりつけてある裏裂には、その端から〇・七センチから〇・八センチ入ったところに一センチ前後の間隔に、萠黄色絹糸（撚は不詳）のとじ目が見えるが、これは裏裂が表より外に出てこないための配慮である。玉縁裂は黄色緞子は竪裂が使ってあるが、黒繻子は横裂である。

袖口下の羅紗の接ぎ合わせは、紅色絹のS撚の糸で〇・三センチから〇・四センチの細かい間隔の針目でかがられており、肩山や襟附の接ぎ合わせのように無漂白の麻糸ではない。

また、右の脇裾損傷部分から裏裂の縫い合わせの状態が見られる。この部分でわかる裏裂の縫い合わせは、白絹S撚の糸で〇・二センチから〇・三センチの細かい平縫の針目である。

以上述べてきたように、この紺・緋羅紗袖替り陣羽織は、左右相称の個所で左右同寸であるべきところが多少異っていたり、竪裂、横裂の使用が鷹揚であったりして、室町・桃山期の仕立て方の特徴もあらわれてはいるが、しかしこの時代のものとしては非常に几帳面で丁寧な、そして縫製の技術も極めてよい立派な仕立である。羅紗という部厚くて重い材料で袖のついた陣羽織を作るとなると、かさもあり取扱いだけでも容易ではないのであるが、つき合わせに接ぎ合わせ、モールで縁飾りをつけ、玉縁で裁ち目をくるみ、裏裂をかがりつけるといった手のかかる仕事を、これだけ入念に、糸の締め方も見事に一貫させて仕立てあげる技術は、さきに報告一（美術研究二一六、二一九号）で取扱った金銀襴緞子等縫合胴服の縫製技術に匹敵すると思われる。

（表裂）　挿図10b

身頃の紺羅紗と袖の緋羅紗は同質と思われる。いずれも上質の羅紗で、約四百年を経ている現在でも堅くならず、柔らかく温かである。紺の色も緋の色も、上質の羅紗特有の光沢を今もなお失わず品のよい深みのある色合いである。

（玉縁裂）　挿図10b

黄色緞子――裂の細い部分であるので文様は不詳。地は経の三枚綾／（右上り）、文様は緯の六枚綾／（右上り）、経糸緯糸ともに同色の黄色で先染。密度は一センチ間に、経は六〇本前後、緯は三〇越前後である。

黒繻子――横裂が使用してある。経の五枚繻子で、経糸はZ撚、経糸緯糸ともに黒の先染。密度は一センチ間に、経は七六本前後、緯は三六越前後である。

（裏裂）挿図10ｃ

上質の萠黄色の緞子で、菊と牡丹が一段おきに互の目に並んでいる。文丈は七・五センチ前後、窠間幅は五・三センチ前後で、菊も牡丹も径が二・五センチ前後である。経糸は萠黄色でＳ撚、緯糸は金茶がかった黄色でＳ撚、組織は、地は経の三枚綾で／（右上り）、文は緯の六枚綾で／（右上り）、密度は一センチ間に、経は七五本前後、緯は三〇越前後である。

乳の裂――経糸は萠黄色、緯糸は鶸色に近い黄色がかった萠黄色の先染の平絹で練緯。経糸は二本ずつ寄っており、密度は一センチ間に、経は八〇本前後、緯は三〇越前後である。

(6)　緋羅紗陣羽織（裏・黄緞子、図版Ⅳａ、挿図12）

緋羅紗陣羽織二領のうち、裏が黄色緞子で、丈が長い方である。この陣羽織は、後裾の裏裂に水に濡れたためについたようにしみあとがある以外はほとんど損傷がない。黄色の四つ打の胸紐がついており、また、羅紗の裁ち目になっている襟の外周、立褄（襟下）、裾、裾脇アケ、袖アキは平打紐のような紺色の飾り紐でくるんで縁飾りを兼ねている。

金茶がかった黄色の裏裂と紐は、猩々緋の深紅の羅紗と対照がよく、陣羽織全体から見た胸紐の占める量も適切で、羅紗の裁ち目をくるんだ紺色の縁飾りも配色がよく適度なアクセントになっている。襟は前身頃に嵌めこんであって、形全体は前も後も極めて簡単にすっきりとまとまっている。

（形状、法量、仕立て方）

形状、法量は一覧表の(6)並びに挿図13。袷で、裏は、牡丹と鳳凰が飛文様になっている黄色緞子（挿図12ｂ）の通し裏である。肩山は接ぎ目になっており、背面の中央には襟肩あきの位置から六センチ下ったところに、上下に四・八センチ切ってあけた穴（挿図13）がある。穴の周囲は、表の羅紗と裏の緞子（その位置は裏裂の背縫線上であるので裏裂の方はその部分は縫わないであけてあり、背縫の縫代を割ってある）がきっちりつき合わせに重ねてあり、濃い浅葱色の絹のＺ撚の糸で、針目の間隔は〇・二センチ前後で表と裏に交互に糸をかけて穴の始末がしてある。こういう穴は陣羽織にはよくあけてあり（挿図20の紙衣陣羽織にも背面に同様の穴があいている）、ここに旗を挿したりしたのである。

肩山、両脇、襟の表裂の羅紗の接ぎ方は、(5)の紺・緋羅紗袖替り陣羽織や、(7)の緋羅紗陣羽織（裏・浅葱）の接ぎ方と多少異って、接ぎ目が内側（裏側）に幾分盛り上るようにしてある。従って表から見ると、羅紗の接ぎ目は幾分凹んでいる（図版Ⅳａ、挿図12参照）。このように接ぎ目がなるようにするには、羅紗の接ぎ合わせを裏側から、二枚合わせて二枚を一緒に細かくかがり、かがり終ったところで縫目をひろげ、形を整え裂を落着かせたのであろう。これら接ぎ目の針目の間隔は〇・二センチ前後のきわめて細かいものであり、使用糸は赤の絹糸（損傷個所がなく、その上、糸がよく締まっているので撚がわかるだけ縫糸が出ておらず撚は不詳）である。

羅紗の裁ち目がくるんである縁飾りの紐は、幅が一・二センチの紺色の平たい絹紐である。その紐を二つ折りにして羅紗の裁ち目がくるんであるわけだが、〇・五センチから〇・六センチの針目で、その紐の両側端に糸を通しながら羅紗の裂に縫いつけてある。使用糸は赤の絹糸（撚は不詳）で、この縁飾りも、(3)の緋雲文緞子陣羽織や(5)の紺・緋羅紗袖替陣羽織の縁飾りや玉縁同様羅紗に縫いつけてある糸がよく締っていて、羅紗の表側にも裏側にもよく密着している。この縁飾りの紐は、袖アキの最下端に脇下に左右一個所ずつと右前裾から二七・五センチ上方と左前裾の角のところの計四ケ所に継ぎ

目があるが、その継ぎ目は、脇の分は後身頃側の縁裂を前身頃側の縁裂の上にかさね、赤の絹糸で三、四回巻き縛りかがってあり、他の二個所は何れも上方を上にかさねて赤の絹糸で三、四回巻き縛ってある。

この陣羽織の裏裂の縫合わせ個所である背縫と両脇縫は、白絹糸が用いてあり、縫目は〇・三センチ前後のこまかい針目である。背縫の折り被せは、われわれがいう正しい方向（美術研究二二八号、二〇頁、挿図3参照）である。

胸紐は太さが〇・二五センチぐらいの細い黄色絹の四つ打紐で、この胸紐の取附方も(1)の紙衣陣羽織や(4)の白雲文緞子陣羽織と同じような、陣羽織にじかに錐のようなものであけた穴を通して結びつける方法である。(1)や(4)の陣羽織同様穴は一個所に二つずつあけてあるが、この陣羽織の穴の位置は、はめこみになっている襟の下端から三・五センチ下方で、この紐は裏側から表に出し、また裏に入れて裏で結びつけてある。

この羅紗の陣羽織は、(5)の紺・緋羅紗陣羽織にくらべ仕立は簡単ではあるが、全体に非常に技術の程度が高い立派な仕立である。

（表裂）

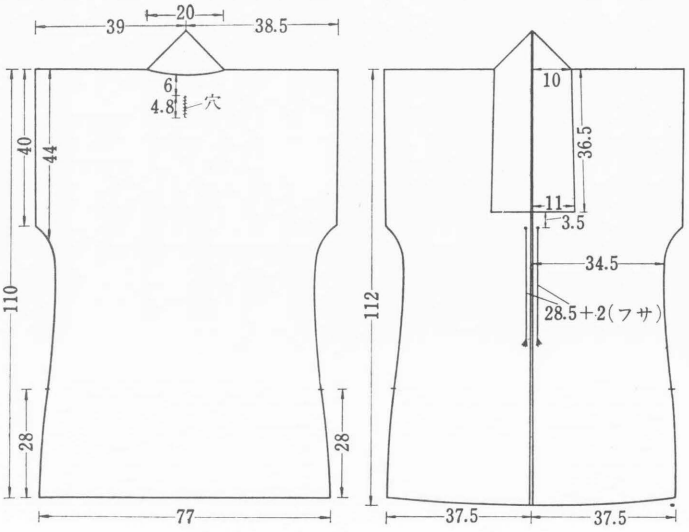
上質の緋羅紗で、(5)の紺・緋羅紗袖替り陣羽織と同様、およそ四百年も経っている羅紗とは思われない柔らかさ温かさ、色合いである。

（裏裂）　挿図12 b

上質の黄色緞子で、挿図12bで見られるような牡丹と鳳凰と雲が入っている四角（竪は二四・五センチから二八・五センチまで種々、横は一三センチ）の文様が飛文様になっている裂である。緯糸の打込みにむらがあるので文様の長さも文丈も種々であるが文丈は六〇センチ前後である。経糸と緯糸は金茶がかった黄色の同色で先染、経糸はゆるいZ撚、緯糸の撚は不詳、組織は、地は経の五枚繻子、文は緯の五枚繻子で裏組織、密度は一センチ間に、経は一三〇本前後、緯は三五越前後である。

挿図12　a．緋羅紗陣羽織(6)　背面　米沢　上杉神社蔵

b．同　裏裂



挿図13　緋羅紗陣羽織(6)　実測図

(7) 緋羅紗陣羽織（裏・浅葱緞子、図版Ⅳb、挿図14）

緋羅紗陣羽織のうち、裏が浅葱緞子で、丈が短い方である。この陣羽織は黒の平打紐のような縁飾りが鉄媒染のために朽損して[註5]、図版で見られるように大方が剝落してしまっている。

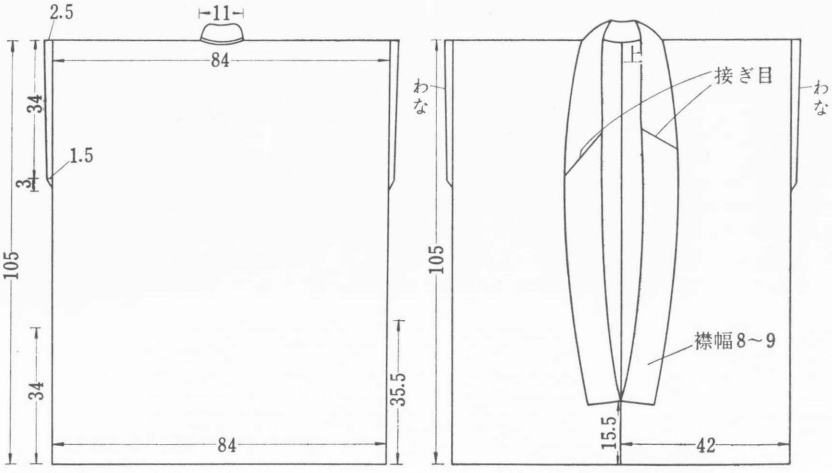
この縁飾りは、羅紗の裁ち目をくるんでいるものと、袖アキの竪筋、横筋、背面中央の竪筋のように、単に装飾の目的だけで附けられているものとの二種類があるが、双方合わせて黒一色のアクセントとなり、この緋羅紗陣羽織の唯一の装飾となっている。

正方形よりは幾分竪長いが、しかし四角といっても通用するこの陣羽織の形にこのアクセントの入り方は適確であり、それがまた深紅の羅紗に黒一色というのであるから、縁飾りが剝落する前は、どんなにか若々しい感じの洒落た陣羽織であったろうかと想像されるる。

また裏裂に浅葱の緞子が使われているが、この場合この裂が最適であると思われる。何故なら、この浅葱の裏裂が多少でものぞくことにより、表のともすればきつくなりがちな意匠が緩和されているからで、これが他の色の裏裂である場合を想像すると、なかなかこの組合わせのような爽快さは生じてこない。

（形状、法量、仕立て方）

形状、法量は一覧表の(7)並びに挿図15。袷で、裏は、竜文に雷文菱襷の浅葱緞子（挿図14b）が通し裏でついている。紐なしである。この陣羽織も前出二領の羅紗陣羽織同様、肩山が接ぎ目になっている。背縫はないが、背縫線



挿図14　a．緋羅紗陣羽織(7)　背面　米沢　上杉神社蔵
b．同　裏裂

挿図15　緋羅紗陣羽織(7)　実測図

になる位置には黒の縁飾りの紐がつけてある。この縁飾りの紐は、袖アキのところでも、横縞に二本ずつ並べてある分は単なる飾りである。その袖アキの部分は、肩山の方の幅が五センチ（縫代分を入れると約七センチ）、脇の方の幅が三センチの細長い共の羅紗の裂が幅を二つ折りにして、袖アキの外側にわながくるようにして別につけてある（挿図15）が、この二本ずつの横縞は、袖アキの位置にとりつける前、それも、その羅紗の縁裂を二つ折りにする前の拡げた状態のときに縫いつけてある。

肩山の接ぎ目と、襟裂の左右の胸のあたりにある二個所の接ぎ目は、(6)の陣羽織の肩山、両脇、襟の羅紗の接ぎ目と同様な、表側の縫目が多少凹む方法が行われている。肩山の接ぎ目は萠黄色の絹糸が二本どりで、針目の間隔は〇・三センチ前後、糸もよく締まっている。襟の二個所の接ぎ目は、襟の裏側に裏裂がついていないので観察できるが、赤のZ撚の絹糸二本どりで、はじめに右上り〜のかがり目をかけて、その二行程（一往復か）で針目が掛け合わされた形（×）になって接ぎ合わせが行われている。襟附は、これも裏側が観察できるので記すと、襟の裏側の襟附縫代の上に、身頃の表側の襟附縫代を重ねておき、萠黄色のZ撚の絹糸二本どりで、一・三センチ前後の針目の返えし縫で襟が身頃にとじつけてある。その後、襟を折り返えして襟の表側を見て、浮き上っている表襟の縫代の端を身頃の羅紗にかがりつけている。その針目は間隔が〇・五センチ前後である。袖アキの縁裂も萠黄色Z撚の絹糸二本どりでかがりつけてある。針目の間隔は〇・三センチ前後である。その縁裂の下、脇の部分は三センチ間、縫い合わせずにあけてある（挿図15参照）。袖アキの竪筋の縁飾りは、袖アキの縁裂がつけられ、裏をかがりつけてから、附けたようである。裏側の縫目を見ると、表の竪の縁飾りを縫いつけた糸が裏裂の上に竪に通って出ているのでその縫方の順序が想定された。脇の接ぎ目は赤のZ撚絹糸が用いてある。針目の間隔は〇・三センチ前後である。これらの羅紗の接ぎ目は、前述二領の羅紗陣羽織同様、糸もよく締まり丁寧な仕立である。

縁飾りと、縁飾りを縫いつけた黒糸は朽損して剝落しているので、縁飾り及び縁飾りの取附状態はさだかでないが、用いられた縫糸は黒の絹糸で、撚はゆるいZ撚のようである。針目は〇・二センチから〇・四センチまで種々見られる。

裏裂は縫い合わせ個所もかがりつけ個所も何れも萠黄色絹糸が用いてあり、その糸は比較的撚のきついZ撚である。背縫はその糸一本で針目は〇・三センチ前後の平縫であり、両脇はその糸を二本どりにして、針目の間隔は〇・六センチから〇・七センチにかがりつけてある。背縫の折り被せは、われわれがいう正しい方向（挿図15、及び美術研究二二八号、二〇頁、挿図3参照）になっている。脇は、右脇は後身頃の側が高く（上に）、左脇は前身頃の側が高くなっている。

（表裂）

剝落した黒の縁飾りが粉末になって所々に着いているので多少汚れっぽく見えるが、上質の緋羅紗で、前述(5)、(6)の陣羽織の羅紗同様、およそ四百年も経っている羅紗とは思われない柔らかさ、温かさ、色合である。

（裏裂）　挿図14b

上質の浅葱の緞子で、雷文菱が襷になって繋り、その襷文によって生じる互の目配列の菱形の中には、いずれにも竜文が入っている。文丈は四センチ前後、窠間隔は五センチ前後である。経糸、緯糸ともに浅葱であるが、緯糸の方が色が薄い。組織は、地は経の五枚繻子で、文は緯の五枚繻子で裏組織。密度は一センチ間に、経は九〇本前後、緯は三〇越前後である。

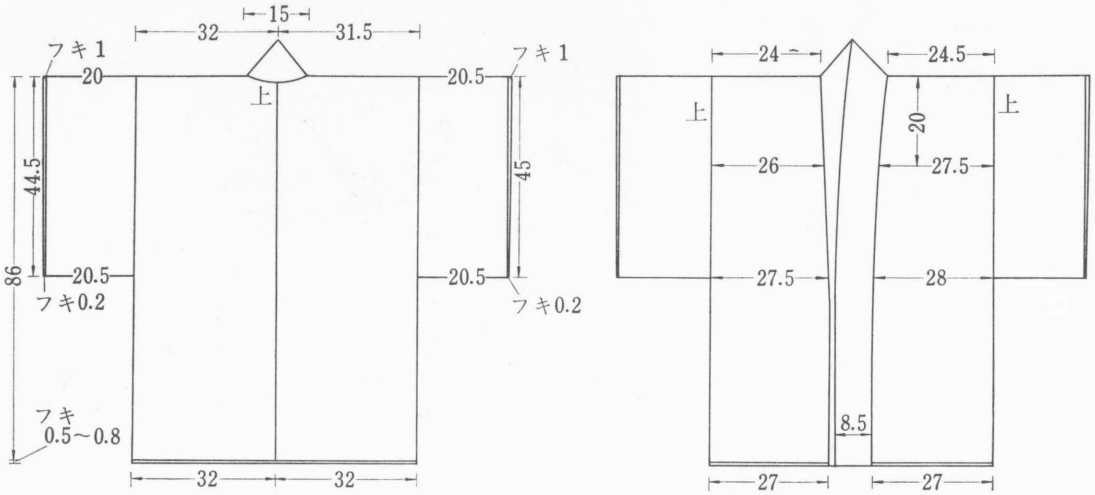
(8)　白平絹雲竜文描絵陣羽織（図版Ⅱb、挿図16）

昭和三十九年度に修理が行われた陣羽織である。

描絵の緑色の部分（竜の鱗が大部分で、ほかに雲の縁取りにもある）が著しく朽損して断片、粉末となっていたが、修理で裏打が行われ、図版や挿図で見られるような状態にまで形が整えられた。

この描絵の陣羽織は、構図や採色に着装上の効果がよく配慮されている。即ち、野外に立って特に目立つ背面には背中に大きく多彩な雲竜文を、腕が動く度に隠されたり皺が寄る前面には青一色（薄青、緑、薄茶、白が補助的に用いてあるが）で立ち雲を左右の胸に一つずつ表わしている。

挿図16　白平絹雲竜文描絵陣羽織(8)　米沢　上杉神社蔵　註8



挿図17　白平絹雲竜文描絵陣羽織(8)　実測図

この竜の姿態、面貌などには明代、殊に万暦（1573～1619）頃の陶磁の竜文に通うところもあるように思われる。それらは以前みられた霊獣としての尊厳性などを失い、華やかに仕立てられている。当時の他の工芸の竜文も遺品が少いので適確にはつかみ得ないが、ほぼ同じような傾向にあったと見られ、恐らくこの雲竜文も、そうした明後期の工芸品の意匠に倣うところがあったのではないかと推測される。

この雲竜文には、大体において次に列挙する色が用いられている。緑、青、茶色がかった赤、濃いトキ色、薄いトキ色、茶色がかった黄、金、白に近い薄い青、白、薄い黒（墨の使用であろうか）、黒。この中、緑と青と茶色がかった赤が分量も多く目立っている。

この大胆に堂々と雲竜文が描かれている陣羽織は、戦場における武将の威厳を示し、最後の場所を飾る意味ではまことに当を得た派手やかなものである。

形状や法量（一覧表参照）で目立つことは、丈は八領中最も短く、裄も他の袖のついている二領より十センチばかり短い（この陣羽織の裄は、上杉家伝来の小袖、胴服を通して見た場合でも最も短い。次に短いのは紅地雪持柳繡、襟辻ケ花染胴服―胴服の

三一

挿図18　a．伝上杉景勝所用明服　　万暦23年　米沢　上杉神社蔵

b．　同　　胸飾（刻糸）部分

は、すっきりと無駄がなく明快であり、また小ぶりで、袖のついた陣羽織としては最大限に単純な形態は、綿入仕立ての効果も計算に入れているのであろう。着装した時に陣羽織全体が適当に張って雲竜の描絵に余分な皺が極力入らないよう考慮してあるように思われるのである。

着装効果を念頭においてこの陣羽織を眺めた場合、前姿も後姿も堂々として隙がなく、一種の威圧があり、引き締った派手さを感じさせる。まさに戦陣における武将の威容を示すに足る陣羽織といえよう。

（形状、法量、仕立て方）

昭和三十九年度の修理では損傷部分に裏打ちを行ったので一応全部を解いて仕立直してある。しかしこの仕立直しは原形並びにもとの仕立に忠実に行われているので、法量、仕立て方は修理後の調査[註7]ではあるが、信憑性はあると考えられる。

形状、法量は一覧表の8並びに挿図17。

紅練緯の通し裏である。

背縫の折り被せは、表はわわわれがいう正しい方向で、裏は逆になっている（美術研究二二八号、二〇頁、挿図3参照）。裏の脇縫の折被せは、左は前身頃が高くなっているが、右は後身頃が高く（上に）なっている。

胸紐の乳は裏裂と共裂の紅練緯で、幅が〇・九センチ、長さは二つ折りにした長さが二センチであり、左右とも肩山から三二センチ下った位置に、裏(2)、美術研究二四二号参照――で五三センチである）。衽も襠も背割れや裾脇あけもなく、襟は前身頃の裾までついている。その襟は内側に、身頃の裏と共裂の襟裏がついているので襟首囲りのところを内側に折って着装したことになる。裏裂は身も襟も紅練緯で表との対照が鮮やかであり、胸には角八つ打の太くて長い（一辺が〇・五センチから〇・六センチの太さの角紐で、長さは房とも四八・五センチ）紅の派手な紐がついている。

これらの点を総合すると、この陣羽織は思い切った派手さではあるが、表裂と、表裂に描かれた描絵、裏裂、胸紐から成立する色彩構成

襟附にはさみこんで縫いつけてある。左右ともわなが上、縫目が下になっている。

（表裏）

目の粗い平織の生絹で、絵絹のようである。経糸は細く二本ずつ寄っており、緯糸は、練緯その他の平絹にくらべずっと細い。密度は一センチ間に、経は四〇本前後、緯は三六越前後である。

（裏裏）

後染の紅練緯で、裏裏と襟裏は共裏である。経糸は細く二本ずつ寄っており、密度は一センチ間に、経は四八本前後、緯は四四越前後である。

四　むすび

以上の調査によって、上杉家に伝わる八領の陣羽織には、次の諸事項が結論として述べられる。

八領は、すべて疑う余地のない「うぶ」な陣羽織で、且つこの種の染織品としては極めて保存状態のよい上杉家伝来の服飾類の中でも、胴服に次いで良好な状態で今日に遺されている。また八領ともに、形態の上では、室町・桃山期の小袖や胴服の特徴に共通する諸点を備えており、陣羽織の材料は、渋紙や輸入品の羅紗、緞子、ヤクの毛、モール等を相当自由に配色よく効果的に用いてはいるが、東京国立博物館蔵の伝小早川秀秋（天正一〇年～慶長七年 1582～1602）所用の緋羅紗違鎌紋陣羽織（挿図21）や仙台市博物館蔵の伝伊達政宗（永禄一〇年～寛永一三年 1567～1636）所用の黒羅紗地裾紅羅紗山形模様陣羽織（挿図22）等、多少年代の下る陣羽織に屢々見られる意匠上の斬新さや南蛮服飾の強い影響は見られない。室町末期の陣羽織としては形も意匠も自由で斬新ではあるが、仔細に観察すると、八領は何れを見ても、形態は当時の小袖や胴服を陣羽織としての機能に適応させて単純化したに過ぎず、意匠は当時の小袖や胴服の意匠が基盤になっている。この二点は、多少時代が下る陣羽織では既に稀薄である（挿図21、22、23、24参照）から、初期の胴服がその時代の小袖に酷似していた[註9]と同様、初期の陣羽織がその時代の小袖や胴服に源を発したような面があって然るべきではなかろうか。

仕立には室町・桃山時代の仕立の特徴である鷹揚さや技術の幼稚さがあり、特に鷹揚さは高度な技術で行われている羅紗の陣羽織にも屢々見られる。綿入仕立、袷仕立の方法では、すでに報告二や報告四[註1]で述べた上杉家伝来の小袖や胴服との共通性がこれらの陣羽織でも認められる。

更に各陣羽織に用いられている表、

挿図19　a．渋染麻日の丸紋陣羽織　慶長2年　東京国立博物館蔵
b．同　背　面

b．同　背面

挿図20　a．紙衣陣羽織　室町～桃山時代　東京国立博物館蔵

挿図22　a．伝伊達正宗所用　黒羅紗地裾緋羅紗山形文陣羽織　桃山時代　仙台市博物館蔵

b．同　背面

挿図21　a．伝小早川秀秋所用緋羅紗違鎌紋陣羽織　桃山時代　東京国立博物館蔵

b．同　背面

裏、縁、襟の裂地の種類と、それらの染と織の技術、文様、並びに描絵は、すべて室町・桃山期の特徴が顕著である。加えて、室町・桃山期の意匠の特徴である対比対照の美も、各陣羽織とも、表裂の中においての配分、表裂と裏裂との対照等で見事に発揮されている。

そして、材料、形態、意匠上、如何にも戦国時代の武将が用いたにふさわしい実用、装飾、

挿図23　a．伝徳川家康所用　紫縮緬陣羽織　桃山時代　上野東照宮蔵

b．同　背面

挿図24　a．伝徳川家康所用　白ビロード陣羽織　桃山時代　東京国立博物館蔵

b．同　背面

挿図25　有栖川宮熾仁親王所用　紫顕文紗陣羽織（夏用）　江戸後期　東京国立博物館蔵

挿図26　朽葉色葵唐草文顕文紗陣羽織（夏用）　江戸後期　東京国立博物館蔵

両面にすぐれた陣羽織である。

従って、これら八領の陣羽織は、明らかに室町・桃山時代の初期陣羽織である。

次に上杉家のものとする検討からはどうかというと小袖や帷子、胴服の場合と同様なことが明らかになる。

即ち、意匠の上でも品質の上でも極上の優品揃いで、一貫して並々ではない凝り方、贅沢、配慮が行われており、この点は、上杉家伝来の服飾類中、胴服、小袖に次いで著しい。ただ胴服や小袖、帷子の場合は、凝り方、贅沢、配慮が事実よりは目立たないように表現されているが、陣羽織では戦陣での派手さや威容の目的もあってか表現はいささかも控えられてはいない。

小袖や帷子、胴服の場合に、上杉家のものであるという決め手になった竹に雀の紋所がこの陣羽織の場合にはないが、八領の陣羽織相互の裂地、染色、文様、形態、法量、仕立て方、意匠等、前項で述べた調査事項に基いて、同一点、類似点、関連性を辿って照合し、すでに調査ずみの小袖、帷子、胴服と比較すると、これら八領は、おのずから一連のもの、即ち、室

町・桃山期の上杉家の陣羽織であることが明白になる。

ところで、これら八領の所用者を検討すると、陣羽織の場合は形が自由であるため、身丈のように形によって寸法の差が大きい個所もあって、小袖や帷子、胴服のように法量の上で所用者を推測することは困難ではあるが、法量に加えて、形態、意匠、地質等を通して考察すると所用者は一人と見做すのが自然のようである。しかし、小袖や帷子、胴服の場合と同様、時代をあまり隔てない所用者のものの混入も考えられるが、上杉家の場合は、小袖や帷子、胴服の報告でも述べたように、謙信以外の該当者は景勝（弘治元年～元和九年 1555～1623）一人と限定されるので、これら八領の陣羽織は、伝来通り謙信所用か、或は景勝所用のものも入っているかということになる。

以上述べてきたように、上杉家伝来の陣羽織八領は現在のところわが国最古の陣羽織である。それらには、従来の初期陣羽織の遺品資料には見られなかった古様があり、また何れも「うぶ」であり、八領がそれぞれに独自の特色を持った、初期陣羽織を知る上にはまことに得難い貴重な資料である。そして、染織品としても最高の優品が揃っており、服飾品としても機能面、装飾面の両面に優れた傑作揃いである。しかもそれらが保存状態も至って良好に伝えられていたのであるから、これは染織工芸史、並びに日本服飾史上、極めて意義の深い重要な資料の発見であったのである。

（一九六八年八月）

註

1　報告一――伝上杉謙信所用金銀襴緞子等縫合胴服について　上・下　美術研究二一六・二一九号
報告二――伝上杉謙信所用小袖十二領　美術研究二二八号
報告三――伝上杉謙信所用帷子四領　美術研究二三三号
報告四――伝上杉謙信所用胴服八領　上・中・下　美術研究二四二・二四三・二四四号

2　謙信の身長は小袖の身丈から推測して一五八センチ前後（約五尺二寸）が割り出された――美術研究二二八号一八～一九頁――。小柄なようであるが、東京大学理学部人類学教室の鈴木尚教授によれば、当時の日本人の身長は成人男子で五尺一、二寸が普通だそうであるから謙身の身長が一五八センチ前後というのは決して小柄ではない。

3　ここでいう綿は真綿である。

4　練緯というのは、経糸（たていと）に精練しない生糸を用い、緯糸（よこいと）（横糸）に精練した練糸（ねりいと）を用いて平組織に織った絹織物で、経糸は緯糸とくらべて目立って細く、また緯に比して経の糸数が多い。表面に独得の光沢があり、薄手で張りのある生地である。室町・桃山時代の平絹にはこの練緯が多い。

5　植物性染料を用いて黒、茶系の染色を行う場合、多くタンニンを含有する材料を用い、これに鉄漿を媒染として加えて発色させる。そのため鉄分による裂地の腐触が甚だしいのが常である。

6　緋雲文緞子陣羽織(3)や緋羅紗陣羽織（(6)、裏・黄緞子）のモールの飾紐は、平に置いて縫いつけてある個所以外に、モールを二つ折りにして縁を挟み込んで玉縁風に仕上げた個所があるが、この紺・緋羅紗袖替り陣羽織ではモールを二つ折りにした玉縁風な用い方はなく、平に置いた個所ばかりである。

7　白平絹雲竜文描絵陣羽織(8)は、修理以前は拡げることも危険な状態の損傷であったから、うぶな状態では調査ができず、やむを得ず修理後に法量、仕立等当った。

8　当研究所が上杉神社の服飾類を撮影した時には、この白平絹雲竜文描絵陣羽織(8)はまだ未修理であったから撮影はさし控えた。その後修理が終り、大和文華館でこの陣羽織の撮影が行われたので、ここに掲載した図版写真（Ⅱb）並びに挿図写真（挿図16）は、大和文華館で撮影されたものを使用さしていただいた。

9　報告四の下　美術研究二四四号、三九頁。